

子規俳句潺潺 3

——明治二十八・二十九年

宮 坂 敏 夫

行く秋をしぐれかけたり法隆寺

明治28年

『寒山落木』巻四所収。秋、暮秋に出る。「法隆寺」と前書。他に『頼祭書屋俳句帖抄上巻』、『新俳句』、『病餘漫吟』にも入っている。「めさまし草」(明治29・10・31)にも発表。「病餘漫吟」は明治二十八年(一八九五)中の作を漸次恢復の病余に書き加えていった草稿。それによると、上五を「行く秋の」とする形が見え、これがはじめの形だったらしい。

「行く秋」とは、去りゆく秋を惜しむ心。秋も終り、晩秋ぎりぎりの季語である。しぐれは「十月の雨をばしぐれといふ」(『能因歌枕』)とあるように、旧暦十月、初冬の雨として、平安朝以来歌人愛用の歌語。「しぐれかけたり」とは、パラパラと時雨に見まわれたくらいの意。かけるは動詞の連用形につき、「……し始める」の用法。虹を懸ける、橋を架けるなどの他動詞のかけるではない。行く秋という秋の名残を詠んだ句を子規は八十六句残しているが、掲出句を詠んだ二十八が三十四句ともっとも多い。日清戦争従軍記者

の無理がたたり、罹患に振りまわされ、九死に一生を得た秋、思いが深かったのである。

行く秋や一千年の佛だち

行く秋や奈良の小寺の鐘を撞く

行く秋や奈良の小店の古仏

行く秋や奈良は古寺古仏

いずれも同年の奈良詠、奈良と行く秋との調和をしきりに考えていたようだ。

子規の奈良滞在は、十月下旬。十月二十四日から二十八日までの五日間か、二十六日からの三日間か、日程上いささか不明のところがある点は、既出「夜寒」の句で触れた通りである。いずれにしても、晩秋には違いない。掲出句と前書を共有する同時の作

行く秋を雨に氣車待つ野茶屋哉

「病餘漫吟」には、氣車が氣車となっているが、この一句により法隆寺には奈良から汽車で行ったことがわかる。「雨に氣車待つ野茶屋哉」とこと細かに、記録風につくるのが子規の尋常の句の詠み方。現代人の眼からみると凡句と思われるが、汽車と野茶屋との配

合は当時の俳人にはなにがしかの新鮮さがあつたのだろう。野茶屋は、どここの路傍にもある休憩茶屋。「とぶ蛇に任せて行ば野茶屋哉」(『文政句帖』・一茶)のように近世俳諧から用いられている。すると、「雨に馬車待つ野茶屋哉」では凡作。汽車という明治の新造語を配したところに、一抹の俳味への工夫があつたといえよう。

これも同じ時の作と推測され、「法隆寺」とある『頼祭書屋俳句帖抄上巻』の句、

稲の雨^(あめ)斑鳩寺にまうでけり

先の「野茶屋」とこの「稲の雨」とを並べると、両句とも雨の句。掲出句の「しぐれかけたり」とは、同じ雨でも違いがある。三句の雨を季節の推移順に並べると、

稲の雨(秋たけなわの頃の稲田に降る雨)

雨に氣車待つ(晩秋のつめたい秋雨)

しぐれかけたり(いわば初冬のしぐれの走り)

右のように、三様の雨と受けとれるが、これは子規の表現の妙といたつたもので、多分、三句とも同じ時刻に同じ情景を踏まえて詠った実景の囑目句とみてよいであろう。

さて、掲出句に戻る。「行く秋の」を「行く秋を」と、格助詞「の」を「を」に変えた。「を」はもともと感動詞から変化したもので、対象を認め、確認する気持を相手に表明することばといわれる。「行く秋の」と中途半端に言い流した言い方よりも、「行く秋を」は対象の掴み方がぐっと強い。

一句は、過ぎゆく秋を惜しみ、法隆寺に佇んでいると、折からバラバラとしぐれてきたという意。句意明瞭。晩秋から初冬へと微妙に移りゆく季節のあわただしさとそれにとまなういっそうの惜秋の情をさらっと詠んでいる。大和古寺の代表法隆寺詠にふさわしい格調がでた佳句である。

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

明治28年

『寒山落木』巻四所収。秋、柿に出る。「法隆寺の茶店に憩ひて」と前書がある。「海南新聞」(明治28・11・8)には「茶店に憩ひて」。「病餘漫吟」では「法隆寺茶店にて」。「病牀六尺」(『日本』・明治35・8・30)には上五の表記が「柿食へば」。『頼祭書屋俳句帖抄上巻』は前書も表記も掲出句と同じ。

子規のもっとも有名な句である。句碑が法隆寺境内鏡池の傍に立っている。松瀬青々らにより大正五年(一九一六)九月十七日、境内の聖霊院前に建てられたもの。場所は同じである。そこは、掲出句の前書にある茶店の跡地であつた。

法隆寺の創建は謎につつまれている。寺は、聖徳太子、蘇我氏、大和朝廷の三者にかかわって建てられた古刹^{こさつ}。奈良県生駒郡斑鳩町^{いけまがらみ}にある聖徳宗の総本山。

句意、大和は折から柿日和、法隆寺に立ち寄った後、茶店でいっぶくして柿を食べる。待望の柿にかぶりつくと、その途端、法隆寺

の鐘がゴーンと鳴った。秋の韻きだ。

柿は、「その味はひ絶美なり」（『本朝食鑑』）といわれる大和名産の御所柿であろう。「くへば」は、食べていると単に事実を述べて下へ続ける偶発的な意にとる。中七の「鐘が鳴るなり」となら因果関係があるわけではない。

この点に關し、「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」いつもの子規調ではない。「柿食ふて居れば鐘鳴る法隆寺」とは何故言はれなかったであらう。（『頼祭書屋俳句帖抄上巻』碧梧桐・「ホトトギス」第五卷第十号・明治35・7）という碧梧桐の見解は、ふだんの子規調を指摘しておもしろいが、「かうなると稍句法が弱くなるかと思ふ」（『病牀六尺』子規・「日本」・明治35・8・30）という子規の見方が頷ける。「柿食ふて居れば鐘鳴る」は、漢文訓読調で、明治の書生俳句の調子。長年人口に膾炙するには、単純明快な上に、緊密なリズムがなければならぬ。その点、掲出句の上五から中七には意外性があり、意外さが破顔一笑へ導く。

さて、柿と法隆寺との配合を考えねばならない。この点は、既出の「長き夜や初夜の鐘撞く東大寺」（明治28年）の鑑賞文中に引用した子規の随筆「くだもの」（『ホトトギス』第四卷第七号・明治34・4）にもう一度当たる必要がある。

そこでは奈良に柿を配合する詩情を発見しよろこんでいる。奈良の宿角定の下女が直径一尺五寸もあるどんぶりに山のように盛った柿を持ってくる。次々に剝かせて食っていると折から東大寺の釣鐘

が初夜（午後八時ごろ）をつげる。東大寺はすぐ頭の上にある。

「柿も旨い、場所もいい。余はうつとりしているとボンといふ釣鐘の音が一つ聞こえた」（『くだもの』）という書き出しで、子規は、いわば、

柿くへば鐘が鳴るなり東大寺

という一句の着想を得ているのである。このような句があっても決しておかしくはない。

ところが、東大寺は、先掲の「長き夜や」という初夜の鐘の句に仕上げ、ついに柿の句にはならなかった。柿を配したのは、東大寺を参詣した翌日訪ねた法隆寺においてであった。

法隆寺の実景を踏まえた、既出「行く秋を」の二句でみた通り、十月下旬の参詣当日は生憎雨天であった。その点からすると、掲出の「柿くへば」の句は、法隆寺に関する虚事、フィクション俳句ということになる。

『寒山落木』卷四所収、同年冬、帰花に、

帰り咲く八重の桜や法隆寺

右の句は、新聞「日本」（明治30・12・1）に載せ、『頼祭書屋俳句帖抄上巻』『春夏秋冬』にも採っている。子規の自信作であったものか。しかし、子規の法隆寺参詣は、同年の十月下旬のみ。そうしてみると、これも空想句であろう。

以上のように、法隆寺に關し子規は一句の発想のきっかけに実景を踏まえたものと空想によったものとの二系列の作をもった。写生

を説き写実を重視した子規が、逆に右のような空想による作句に自信を深めていることは、同年の十二月から「日本」に連載を開始する俳句論「俳諧大要」のひそかな根拠にもなっているのではないか。

「作者若し空想に偏すれば陳腐に堕ち易く自然を得難し、若し写実に偏すれば平凡に陥り易く奇闢なり難し」（『俳諧大要』「日本」・明治28・12・10）といい、究極のところは、「空想と写実と合同して一種非空非実の大文学を製出せざるべからず」（同上「日本」・明治28・12・23）という。写実にも空想にも偏しない中道をこころがけている一文であるが、これは両者を対比しながら、「写実の一方で空想を重視した」「写生に対する一種の反省」（『正岡子規』松井利彦）を考慮した文章である。

子規が本当に法隆寺まで行ったかどうか疑問だと問題提起をしている和田悟朗の一文（『子規と法隆寺』・『岳』・昭和62・7）がある。法隆寺の句には瞩目吟としての実感が稀薄な点や当時の子規の病態では法隆寺行は距離的に困難との二点をあげている。さらに随筆「くだもの」で、五年半ほど昔の回想として、東大寺の釣鐘を云々しているのは、句作のとき東大寺を法隆寺にすり替えたことをすっかり忘れていたからだろうといっている。

私の上掲文は和田説とは異なり、法隆寺へ行ったものと推測している。ただし、「柿くへば」の背景はみてきた通り東大寺体験を法隆寺へ移入したフィクション俳句であり、瞩目吟ではないとみる。

秋風や侍町は塀ばかり

明治28年

『寒山落木』巻四所収。秋、秋風に出る。『獺祭書屋俳句帖抄上巻』にも入っている。中七を「侍町の」（『日本』・明治31・10・18）とした句形が見えるが、「は」と強く提示する形を嫌ったものか。しかし、ここは掲出句形「侍町は」がしぜん。

子規の「病牀六尺」（『日本』・明治35・8・29）によると、松山の城北にある侍町を過ぎたときの所感を述べたものという。

語句格別に難解なところはない。しかし、十七字の短い表現は、一旦そう思い込むとそのようにも受けとれかねない面がある。

碧梧桐が『獺祭書屋俳句帖抄上巻』を懇切に読み、下五「塀ばかり」に拘泥したのは、その例（『ホトトギス』第五巻第十号・明治35・7）であるが、碧梧桐だけの思い込みとはいえないので、すこし触れる。

秋風という可悲しそうな事ばかりいう陳腐な趣向を排し、武張ったいかついところのある侍町を配したのは、作者の苦心の存する点だが、侍町の秋のさびしい光景をいうのに、塀だけを強調するのは、「生硬な感じ」がまぬがれがたい、塀をそれほど強いかわなくとも、侍町というと、塀が続いている光景を想像するという。また、秋風やと莊重な口吻を侍町で受け、重みを持しているところを、塀ばかりと結ぶのはいかにも尻軽で、丁度、社杯かみぐさの社ばかりを

つけて出た感じで、滑稽な句ならいざ知らず、まじめな句にしては不調和だともいっている。

右の碧梧桐の鑑賞は、侍町を十分に機能していた江戸期の侍町と受けとめている。そのように懐古風にとるならば、商人町や寺町と対比される侍町の特徴を塀一点にしぼり強調したのは、まさに芸がないことになる。だが、子規は、明治維新後の頹廃した侍町を描いたつもりだという。「塀ばかりは昔のまゝのが大方は頹れながら猶残つて居るが、其内を見ると家はなくて竹藪が物凄き迄生ひ茂つて居る処もあり、或は畑になつて茄子、玉蜀黍などつくつてある傍に柿の木が四五本まだ青き実を結んで居る処もあるといふやうな光景」(前掲、「病牀六尺」)を詠んだ由。

新しい時代の推移の前に廃れゆく侍町の現況を「塀ばかり」と端的に擲んだのは、下級武士の裔である子規にとり、いささかの哀情をこめて、悪くない表現だ。季語秋風がはたらきすぎるほどはたらいっている。

一方、碧梧桐の鑑賞も成立つ。が、副助詞「ばかり」を、だけの意の限定ととるか、程度を強調したものと受けとるか、それによって季語秋風との照応はどうなるか、この点を考えると、やはり子規のことが首肯されよう。子規は只今の現況をしっかりと見据えている。秋風も単に悲しみや淋しさを助長するだけのものではない。五行説にいう秋は色では白、方位では西、そんな秋の素(もと)のようなものが、この秋風にはうかがえる。

陵(みづせ)をめぐりて吹きぬ秋の風

明治28年

『寒山落木』巻四所収。秋、秋風に出る。「垂仁天皇御陵」と前書。「病餘漫吟」も同じ。「秋の日の一人に暮るゝ野道哉」も同じ前書がつくから、同じときの作である。

垂仁天皇御陵は奈良市尼が辻町西池にある。西ノ京の田畑の中にどっかりとつくられた前方後円墳。前方部幅一一メートル、後円部径一二三メートルという大きな墳丘である。墳は松が茂り、四囲の水濠に映える。陵墓に隣り田道間守の墓の小島も浮んでいる。田道間守は、天皇の命により常世の国へ不老不死の果実をさがしに行き、非時香菓(橘か)を持って帰ったが、すでに天皇は崩御された後であった。悲嘆のあまり彼も死去したという。

「めぐりて吹きぬ」というところに、いかにも荘大な陵を思わせる。ただ、それだけではなく、吹きつつ日暮にさしかかる趣もある。秋風と秋の風は、春雨と春の雨ほどの区別はない。中国の漢武帝は、「秋風起ッテ白雲飛じ、草木黄バミ落チテ鴈南ニ帰ル」(「秋風辞」)と蕭殺たる風をうたったが、同じ秋風でも、こちらは、もっとおおらかな秋風である。

末枯(うらがれ)の若草山となりにけり

明治28年

『寒山落木』巻四所収。秋、末枯に出る。他に「病餘漫吟」にも入っている。末枯とは、晩秋になり野山の草が葉先から枯れはじめること。冬の枯野という枯れ一色につつまれる季語よりも、繊細さがあり、秋のあわれがみえるところから、中世の新古今歌人に愛用された季語。下って蕪村にも「うら枯れや家をめぐりて醍醐道(だごみち)」と堂々たる格調をもった句がある。当然、子規も知っていたはず。

末枯の句は生涯に十七句と子規には少ない。掲出句と同じ二十八年の作

末枯に人を恐れぬ狐かな

この狐は、檻に飼われたものであろうが、わが季節の到来とばかり「人を恐れぬ」というところがおもしろい。この句なども末枯の季語がもつ秋のあわれさは払拭されて、晩秋のあかるい季節感が漂っている。

掲出句、なかばことばの機知に興じた句である。若草山の若草がいつせいに葉先から枯れはじめ、春の若草山がいつのまにか秋の若草山になってしまったことよの意。末枯の山とはいえ、名が若草山だけに明るい。

若草山は一名三笠山(みかさ)。全山一面の草山。一月十五日の山焼きが名高い。

右の句は機知の句でありながら、まろやかな晩秋の若草山がみえるのが取柄。下五「なりにけり」の朗々たる口調のよろしさによる。

奈良の郊外詠、次の句も同時期の佳句。

谷ありや谷は掛稲山は柿

稲の秋命拾ふて戻りけり

明治28年

『寒山落木』巻四所収。秋、稲に出る。「帰京」と前書。「病餘漫吟」によると、帰京と題し、他に二句が出る。

苗代に出て千稲に戻りけり

面白う黄菊白菊咲きやつたよ

苗代の句は掲出句と同想。黄菊白菊は「庭前の菊咲きたきまゝに咲きて面白く愉快に存候」(大原恒徳宛・明治28・11・2)と帰宅報告の手紙にみえることから着想がわかる。

帰京は十月三十一日。前日大阪を発ち、車中泊の後、新橋に着く。鳴雪、虚子、碧梧桐が迎えにきている。

掲出句、句意明らか。「命拾ふて」という俗語を句中にとり入れたところに、無事帰ってきた子規の安堵感がうかがわれる。「命拾ふて」に贅言の注をひとつ付けておく。大学の学友得能文宛書簡に、従軍以来の経過を記している一節「四月十日は小生意気揚々として広島を出発し従軍と出掛候其日に御座候。五月下旬戦を見ずにごくぐと帰る途中船にて発病、神戸病院に在ること二ヶ月あま

り、命をひろひ候のち、須磨郷里と療養にくらし一昨日僅に帰京致候。」(明治28・11・2 傍点宮坂)に出る。

「命拾ふて」は「稲の秋」なるが故におもしろい。稔りの時節をいうのみでなく、ここにもやはり子規流の機知があろう。稲の秋、落穂拾いならぬ落穂のような命を拾い、九死に一生を得て戻ったことよくりの意。

他に帰庵と前書した句が三句ある。

行く秋を生きて帰りし都哉

行く秋の死にそこなひが帰りけり

行く秋や庵の菊見る五六日

「死にそこなひ」は、「命拾ふて」と同想。子規の戯画化の発想がしだいに多くなる。

草市や人まばらなる宵の雨

明治28年

「寒山落木」巻四所収。秋、艸市に出る。他に『新俳句』、「病餘漫吟」にも入っている。「流暢体」の例句に掲げられる。流暢体とは、「句調の安らかに語呂の滑らかなる句をいふ、大方其意味にかゝはらねば区域極めて広し」(「日本」・明治29・3・4)とある。俳句二十四体の一つで、佞屈体の反対だという。

是非もなや足を蚊のさす写し物

山已に月を吐くべきけしきかな

行く秋の鶉も飛んでしまひけり

流暢体の例句である。分類好きの子規らしいアイデアであるが、意味にかかわらず語呂の滑らかさへの着眼は鋭い。音調体という、「只音調のみめづらかなる句」をさす一体もあり、それほど厳密な分類とも思われないが掲出句たしかにリズムがわるくない。

母音の配列をみると、こうなる。

u a i i a / i o a a a a u / o i o a e

細々と低くi音でうたい出し、中七で明るくa音をつらね、おおらかなo音でおさめる。こんなところに、読後、やすらかな思いが漂うのであろう。

草市は盆市のこと。七月十二日の宵から十三日の朝にかけて夜通し市が立った。草とは茄子、ささげ、鬼灯、荷の葉、麻殻からはじまって盆にかかわる切子灯籠や経木など一切、くさぐさのくさ。東京では浅草の雷門、牛込神楽坂、神田旅籠町などが古くから知られていた。

宵のひと雨で、にぎわう草市もことは人がまばら。草市らしからぬ静けさに、かえって、草市のかわった風趣を感じたもの。

子規の草市の句にはこんな句がある。

売れ残るもの露けしや草の市

草市の中を葬礼通りけり

草市ノ草ノ句ヒヤ広小路

明28

明32

明35

吉原の太鼓更けたりきりぎりす

明治28年

『寒山落木』巻四所収。秋、蟋蟀きりぎりすに出る。「病餘漫吟」には下五の表記が蟋蟀と漢字。蟋蟀はこおろぎの古名で、掲出句もこおろぎと解せないことはない。が、同年作にあがるきりぎりすの句をみると、これらはいずれもこおろぎではなくきりぎりすと受けとれる。

草刈つて枕に遠しきりぎりす

大寺の竈は冷えてきりぎりす

馬の息とくあたりのきりぎりす

昼鳴いて子に取られけりきりぎりす

右の通り。佳句が揃っている。子規はこおろぎには蟬の字を当て、一項を立てているところからも掲出句はチョンギースと鳴くきりぎりすの意と解す。

句意はわかりやすい。吉原の廓で打つ太鼓の音が夜更けて間遠くになってきた。叢のきりぎりすの鳴き声もいかに眠そうだ。

吉原は子規のいる根岸から直線コースで一五〇〇メートル程の距離。間に、音を遮る高いものがない明治二十年代には、吉原の遊廓の音が千束田圃を伝わってよく聞こえたもの。太鼓は遊客のお相手、幫間はうかん（太鼓持）の打つ太鼓の音。

吉原は、周知の傾城町である。吉原のはじまり元吉原、古くは葭原よしはらと書いた葭屋町二丁四方の土地に傾城町がつくられたのは、元和

三年（一六一七）というから家康が幕府を江戸に開いて十四年後、江戸時代に入り間もなく吉原がはじまったとみてよい。江戸の中央にあたる御用地から浅草寺の裏、日本堤へ移されたのが明暦三年（一六五七）、新吉原とよばれた地が吉原の前身。千束村の田圃の中に廓ができたもの。ちなみに、吉原へ行くのは昔は、駕籠か猪牙舟ぶねを使った。猪牙舟とは、文字通り猪の牙のように先の尖った細長い舟。舟の場合は舟宿のある柳橋から山谷堀まで乗り、それから日本堤の土手八丁を通り、衣紋坂えもんざかに出る。五十間道を過ぎると廓の大門につきあたる。鉄漿溝てつしょうこうに囲まれた廓は、中央通りの仲の町の両側に茶屋が水戸尻まで並んでいた。

子規と吉原というと、柳原極堂が語る吉原行がおもしろい。長くなるが、座談会「子規を語る」（昭和6・6・10、大阪毎日新聞愛媛版）から紹介する。

明治十七、八年頃、極堂が子規を案内して吉原へ行った場面。子規ははじめての登樓であった。

「大門をはいつてしばらく歩いてゐると正岡が「オイもうわしはやめた」といふ。「どうしたんだ」といふと、「わしは懷中をなくしたわい」といふ。「そいつは困つた、それでは引き返さう」といつて四、五間帰りがけると、そこに正岡の懷中が不思議に人も拾はず落ちてゐた。人が拾はなかつたのも道理ぼろぼろの汚ない財布を紐でぐるぐる巻きに口をしめてゐた。それが煮しめたやうな色をして地面と殆ど見わけがでなかつたので誰にも気づかれなかつたもの

らしい。「あゝあつたあつた」「あつたらさあ行かう」と以前私が連れて行つてもらつた青楼へ二人で登つた。その翌朝連れ立つて帰る途中に正岡は「吉原はまるでつまらん所だね、あれでは詰まらん詰まらん」と繰り返していつた。その時私は「こいつふられたから、あんなことをいふんだな」と思つたが後でよく考へて見ると正岡は本で読んだ吉原文学のおいらん、美しいその遊廓情緒をその心に描いて行つた。ところが現実の吉原はいかに殺風景であつたので少からず失望を感じたものに違ひない。詰り実利主義の吉原と正岡が想像したロマンチックな吉原が一致しなかつたのだな。」

掲出句、「吉原の太鼓更けたり」という口調は、日頃聞き馴れ、ごく日常化している太鼓の音を思わせる。「根岸の里の佗住まい」といつて、初音の里、呉竹の里、日暮しの里と風雅な名で呼ばれていた閑静な地に、遠く吉原遊廓の太鼓の音が夜更けて聞こえるといつた風情は、明治に残る江戸情緒であらう。

子規のおおらかさは、八割の革新の志気と二割の退嬰気分の閑ぎ合いの上にもかもし出されている。掲出句は、その退嬰気分にもいまだ生彩があつた頃の作といえる。

病弱の身を押し立ての従軍記者の仕事は、病いを亢進こうしんさせるだけの結果になつてしまい、松山からの帰京後リウマチスによる腰痛がひどく、患部を蒟蒻こんにやくで温めて一ヶ月程病臥する。とはいふものの、二月出京以来中断していた俳句分類を再開したり、村上露月れつきづや石井露月れつきづら新人をさそつて運座を子規庵で催したりしている。吉原の句

は、この時期の作。

吉原の太鼓では、二年後にこんな句がある。

吉原の太鼓聞ゆる夜寒哉

『俳句稿』所収。明治三十年（一八九七）九月二十二日の作。

「病牀手記」の九月二十一日には、「朝鼻血少シアリ、昨日医師ノ話ニ譬たとへノ下ノ痛ミノ処ニケ処イヨイヨ穴アキタリト、二三日前ヨリ膿出初メタルナリ。俳句ヲ分類ス」とある。このような病状の中で、の作として読むと、季語「夜寒」はたいへん重くひびく。したがつて、「吉原の太鼓聞ゆる」という十二音も、そこには子規のロマンチズムの遊弋うごはみられない。夜寒をいよいよつのらせる俗世の音としてあるのみ。」

吉原の太鼓はさらに翌三十一年（一八九八）にも短歌になる。

吉原の太鼓聞えて更くる夜にひとり俳句を分類すわれは

『竹乃里歌』に所収。これは、俳句の焼直しでありながら、俳人子規の矜持きんぢの内側にあるさみしさをのぞかせた境涯の歌として印象に残る。いかなる評価を得るともわからない、膨大な「俳句分類」の地味な作業を生きた支えとしてやらざるを得ない子規の本音がきこえる。本音であるが、呷うさきのように重くならないところが子規の持味である。

掉尾に吉原の佳句を掲げる。

吉原の廓見えたる冬田かな

明 27

吉原や昼のやうなる小夜時雨

明 28

吉原に禿遊^(かちう)ぶや松の内

明 30

吉原を通れば除夜の太鼓哉

明 30

紅葉焼く法師は知らず酒の醗^(か)

明治 28 年

『寒山落木』巻四所収。秋、紅葉に出る。『獺祭書屋俳句帖抄上巻』にも入る。『春夏秋冬』秋之部には下五の表記が「酒のかん」、「病餘漫吟」では上五が「紅葉やく」とある。新聞「日本」(明治 31・10・26)にも掲載。

句意、いささかのひねりを見せている。「紅葉焼く」とあれば、白楽天の律詩「王十八^(おうじゅうはち)の山に帰るを送り仙遊寺^(せんゆうじ)に寄題す」の中の高名な二句、「林間^(りんかん)に酒を煖めて紅葉^(こうよう)を焼き／石上^(せきじょう)に詩を題^(だい)して緑苔^(りょくたい)を掃^(はら)ふ」を思い浮べる。この詩句は『和漢朗詠集』巻上、秋、秋興の部にも、『平家物語』巻六にも引かれる。楽天の詩は友人王十八^(おうじゅうはち)(王質夫)が、かつて楽天の旧遊の地へ帰っていくに際した送別の詩。あなたが帰る地は、私にとっても、林間に紅葉の落葉を焚いて酒をあたためたり、石上に苔をはらって詩を書いたりして遊んだなつかしい田舎だよとの意。『平家物語』では、高倉帝^(たかくら)が賞玩^(しょうがん)していた紅葉が一夜散ってしまったのを、殿守^(とのり)の伴造^(ともぞう)が焚いて酒の醗^(か)をつけて、きこしめしてしまった。それを聞かれた帝は、「林間に酒を煖めて紅葉を焼く」とはなんと風流な詩心を解するものかなと、お咎めになるどころか称美されたという故事になっている。

掲出句は、楽天の詩にもとづくものであるが、『平家物語』の右の故事を踏まえた子規の蕪村流儀のあそびの句とよめる。

子規の句に登場するのは、ただ落葉した紅葉を焼いている法師。その焚火で酒の醗をつけるなどという風流を知らない。これが今風の法師なんだよと、子規はさっぱりしたもの。楽天の詩や故事のパロディともよめないこともない。

あるいは、もっと穿った見方をするならば、『平家物語』の故事の「殿守の伴造」を法師と置き換えて、高倉帝は「林間に酒を煖めて紅葉を焼く」とたいへん叡感あそばされたが、それは高倉帝ご自身の風流で、先方はなにもそんな高尚な風流は知らず酒を呑んだだけなんだと、身も蓋もないことを思い付いて詠んだのかもしれない。

『分類俳句全集』巻八、秋の部、紅葉

ある人の従者に

紅葉には誰か教へける酒の醗

其角

右のような句が念頭にあった子規は、紅葉を焼く故事など一切知らない法師を描き、そこに明治の現代をのぞかせたものであろう。

「酒の醗」という語句にも執着した子規は、掲出句と同じとき

に、こんな句を詠んでいる。
(あさかむす)
薺^(あさかむす)の蒼うれしや酒の醗

これは、翌朝ひらく朝顔の花の蒼にささやかな夢を托して、宵の酒の醗をつけている市井の人情句。

蘆の花彦根の城は隠れけり

明治28年

『寒山落木』巻四所収。秋、蘆花あしのはなに出る。他に「病餘漫吟」にも入る。子規の手控帖「病餘漫吟」では掲出句の前は、宮嶋での作、
あまがせ 薺の花喰ふ鹿やいづし 敵島

右の句と並んで書かれているところから、大阪からの帰途、彦根あたりの車中吟か。

彦根城は井伊家歴代の居城、天守閣は三重三階。付櫓や多聞櫓もある。金亀城ともいわれる名城。芦は高いものは三メートルにもなる。丈高い芦の花に、不意に彦根城がかくれてしまったとの意。一抹のなごり惜しさがあり、すっきりした佳吟。この頃、「古人好句数一覽」を作り、蕪村を筆頭に推す子規にとり、
たふ 鮒すしや彦根の城に雲かかる
 新花摘

右の蕪村の彦根詠が当然頭にあったものと思われる。

漱石が来て虚子が来て大三十日おおみそか

明治28年

『寒山落木』巻四所収。冬、大三十日に出る。「漱石虚子来る」と前書。同時の作に、「語りけり大つごもりの来ぬところ」がある。大三十日の句では、もう一句「漱石来るべき約あり」と前書した、「梅活けて君待つ庵の大三十日」がある。

「病餘漫吟」によると、原句は、

「虚子が来て漱石が来て大三十日」であったが、漱石と虚子とを入れ替えて、掲出句の形にしたようだ。虚子に対してよりもこの時は漱石に気をつかっていた様子で部屋で青磁の瓶に梅を活けて待っていた。「漱石帰京せしに贈る」として、「足柄はさぞ寒かったでござんせう」などという戯句もある。漱石とは、第一高等中学校本科に入った明治二十二年（一八八九）、二十三歳のときから同級生で親友であった。本年は松山の漱石居（愚陀仏庵）へ八月二十七日にころがり込み、松山での保養中の二か月を一緒にすごしている。出京後の子規のもとへ巣を替へんと存候」（11月7日付）と、一年程で松山を去りたい由をいつてきているが、手紙のたびに六十九句、六十一句と句稿が送られてきている。漱石の作句によくエンジンがかかってきたのである。

歳晚二十五日頃上京の由、漱石から手紙（12・15付）がきた。三日後（12・18付）にまた来る。漱石が実際にやってきたのは、十二月三十一日、大晦日であったが、漱石の用件は結婚話である。十二月中旬、子規が漱石の兄直矩なおただからその件について相談を受けたもよう、子規への礼とその後のことに関し、話しに来た。もっとも漱石の兄への態度ははっきりしていた。この点は先掲の書簡（12・18付）にあきらか。教育と性質の違いから、家族の者とは気風が合わず、子供の頃から「ドメスチック ハッピーネス」（家庭の幸福―注

宮坂) などということは考えたことがなく、近頃は一段と隔意を生じている。兄のいうことも幾分の理屈はあるだろうから上京の折に聞くが、結婚のことは自分で実地に当り処理していきたい。家族の者にしつかりした者がいないので、急を要する場合には貴兄に相談せよと伝えてあったので、ご足労をおかけした。といったことを記し、小生にどこか悪いと思うことがあったならば、遠慮なく指摘してほしいといっている。

貴族院書記官長中根重一の長女鏡子とは、兄直矩の職場(牛込の郵便局)の同僚小宮山の紹介であった。すでに見合写真を交換してあり、漱石は暮もつまつた二十八日に虎の門の書記官長官舎で見合、婚約している。

子規には、以上のことを話したものと思われる。神戸病院に子規がいた頃、軍人の娘との話を断ったことを漱石は伝えていた。子規は相談しがいのある相手であり、なによりもうまが合った。

虚子もやって来た。虚子の方はいうと、これは、漱石よりもいく分面倒な状況にあった。ことし七月、神戸病院を退き須磨保養院へ移ったときに、子規は虚子に自分の後継者となるように要請した。ところが虚子は、このときは、はっきり断る勇氣もなく、「唯だぼんやりと其を聴き乍ら唯點頭いてゐた」(虚子「子規居士追懷談」)という状態。

後継者問題が再燃したのが、十二月に入ってから。病状はかばかしく治癒しない中で、俳句分類を続行し、新聞「日本」に随筆「棒

三味」(12・3・12・27まで12回)の連載をはじめた。しかし、いつも頭にあるのは自分の後継者のこと。碧梧桐は「日本」入社早々の評判は芳しくなく、「無学」だと評される。虚子には須磨以来、学問をせよといいつづけ、「数百度以上」(五百本飄亭宛書簡・12月10日頃、以下同書簡からの引用は飄亭宛と略す)もいったものの、依然としてかわらない。子規は悶々たる「氣違ひじみたる」心境となり、昨夜虚子を訪ねたが不在。今日(九日か)はどうしても、膝詰め談判をという切羽詰った気持ちから勤めを休み、虚子を道灌山の茶屋に誘い出したのである。世に名高い「道灌山の出来事」(虚子「子規居士追懷談」)という。へへ内は虚子の文による。

「どうかな、少し学問が出来るかな」と子規。へ私は学問をする気は無い」と遂に断言する虚子。

「それではお前と私とは目的が違ふ。今迄私のやうにおなりとお前を責めたのが私の誤りであった。私はお前を自分の後継者として強めることは今日限り止める。詰り私は今後お前に対する忠告の權利も義務も無いものになったのである。」

「升のぼさんの好意に背くことは忍びん事であるけれども、自分の性行を曲げることは私には出来無い。詰り升さんの忠告を容れて之を実行する勇氣は私には無いのである。」

二三時間も茶店に腰かけ、二人の間には、へ不愉快な絶望的の沈黙が残った。御院殿坂の下で虚子と別れた子規は、虚子はもうどうなろうとも自分とは今日限り、深い関わりがなくなったのだと

へ痛憤の情」やるかたなく、しかも涙にくれている。「非風去り碧梧去り虚子去る」(飄亭宛)と記して、道灌山での出来事の始終を五百木飄亭に伝えた子規は、「死はますます近づきぬ 文学はやうやく佳境に入りぬ」(づを挿入―注宮坂)と最後に記している。

道灌山以後、子規と虚子とは格別に変わったことはなかったが、虚子のいう「余と居士との間にはどうすることも出来ぬ或物が常に常に存在してゐた」というのも氣持の上では致し方なかったのである。

二十三歳の快樂主義者と自己をふりかえる虚子は子規と六歳違う。この年令の違いは意外に大きく世代の違いと子規の眼には映ったのではなかったか。へたとひ一虚子であっても、其虚子を居士の意の儘に取扱ひ度いと考へたことは稍々無理な註文」といふ、後継者はなにも親近者でなくとも、天下からもっともふさわしい者を求むべきだと、まことに正論を持った虚子の醒めた姿を、子規は狂おしく、かなしく見た。しかも、「功名一件外の御交際御教訓は如旧飽迄も奉願度」(12・15子規宛)という虚子の割り切った態度を、結局は許し、子規と虚子との間には、こころの底にへ或感情上の領會が恒久に存在してゐた」(ホトトギス第十八巻第3号・大正3・12)と回想する虚子の実感を承知せざるを得ない。だが、ここではそこまで先々の結論を掲げるのは早い。

掲出句、子規の氣持を重く支配していたのは虚子であり、原句を直し、漱石を先、虚子を後にした子規の配慮は、以上のような状況

から、よくわかるのである。ともかく、今日の大三十日に二人が見えた。即事をうたいながら、背景は広い句である。

なかなか病むを力の冬こもり

明治28年

『寒山落木』巻四所収。冬、冬籠に出る。他に「病餘漫吟」冬人事に見える。表記は下五が「冬籠」。

人病でせんかたなさの冬籠

明28

同じ冬籠に並ぶ右の句と掲出句の句意はさながら逆。病身の冬籠をいかんともしがたいと諦めの心境にいる者と、上手に病とつき合ひ、病のなかで、それまで見えなかったものが、見えてくる心境に興じている者との違いは大きい。「病むを力」とするまでには、長い病の体験が必要だろう。すると、掲出句などは、子規の半ば願望、半ばフィクション。実感よりも表現に力がいく分入りすぎているか。

寝るやうつゝ小春の蝶の影許り

明治28年

『寒山落木』巻四所収。冬、小春に出る。「病中」と前書。他に「病餘漫吟」冬時候にも入っている。句意いささか微妙。「うつゝ」を夢うつゝ、ぼんやりしている意とみた。寝ようとするが、眠れないままぼんやりしていると、ガラス戸に影を見せて蝶がいくたびも

過ぎる。小春日和の中、ことし最後の蝶なのか。前書の病中が効いている。病人がうつらうつらの状況を「寝るやうつ」とは、巧みだ。子規には「病中」と前書のつく句が多い。掲出句と同じ二十八年冬だけでも次のようである。

開け放す窓は上野の小春かな

起せども腰が抜けたか霜の菊

しぐるゝや腰湯ぬるみて雁の声

冬菊を見るや圃の往返り

右の句は、素材の報告めいて、平板。掲出句がいちばん巧み。他に、「病に臥して」と前書がつき、冬蠅の一句、

我病みて冬の蠅にも劣りけり

蠅は夏のもの、弱々しい冬の蠅よりも自分は意気地がないの意であるが、病子規の自己凝視がうかがえ、いい句である。「病起始めて門を出づ」とある。

はらはらと身に舞ひかゝる木葉哉

右の句も病気の後をはじめて外出するという前書によって、木の葉散りかかる一抹のあわれがあざやかになる。

煤^{すす}払や神も仏も草の上

明治28年

『寒山落木』巻四所収。冬、煤払に出る。『新俳句』、『病餘漫吟』冬人事にみえる。新聞「日本」(明治29・1・9)には、「即興

体」として載る。即興体とは、人事でも天然でも「きはどく変動するもの」を指すという。煤払の日、神棚の神具も仏壇の仏具もごちやごちやと草の上に置かれる。「神も仏も」という抽象的な剥き出しのいい方に、はっとする意外性がある。

ある夜葱筑波^{つくば}嵐に折れ尽せり

明治28年

『寒山落木』巻四所収。冬、葱に出る。他に『新俳句』、『病餘漫吟』にも入っている。「俳句二十四体」(『日本』明治29・1・15)によると、掲出句を子規は、音調体の例句としてあげている。音調体とは、「趣向はさしたる事なくて只音調のみめづらかなる句」というのである。これだけでは、掲出句がなぜそれにあたるのか理解しにくいので、他の例句を掲げる。

うれしさの過ぎぬ正月四日なり

忍ぶれど猫に出でにけり我恋は

夏瘦か否かと問へば維摩黙

あれよあれよ鳴子に鳥の飛ぶ事よ

風やよろよろ薄よろよろと

これらの句を見るを。同音反復によるものや古歌のもじりや語呂合わせ風のものなど、意味の穿鑿^{せんさく}よりも一氣に読み下す調子のよさをもった句群である。

掲出句は、一見講談風。なにか特別な出来事でも暗示する風をみ

せて、どうということもなく肩すかしをする。肩すかしという着地に意外性をもたせることは俳句句型の常套手法であるが、このような暗示的な詠い出しをとる句風は、明治の新俳句の調子なのである。リズムを母音の変化の上からうかがうと、a u o e i / u a o o i i / o e u e i となる。それぞれ576の各句末に「e i」「i i」「e i」と調子を鎮める母音があり、各句の中で明るくゆったりした音が鎮静されるところに、うねりのようなリズムが生まれている。一夜の筑波風で、葱の葉先がみな折れる場景は、根岸郊外に見られたもので、このような郊外風景の発見も注目される。

滄浪の水澄めらば葱を洗ふべし

明治28年

『寒山落木』巻四所収。冬、葱に出る。他に「病余漫吟」では「清めらば」と表記。字余りの句型であるが、7・7・5と読むのであろう。「俳句と漢詩」(『日本』明治30・3・29)の中で、俳句と漢詩との似た点をあげ、俳句は力を漢詩から藉りているといふ、芭蕉は杜甫の詩を読み、その「趣味」を俳句にとり入れたのに対し、蕪村になると、趣味ばかりでなく漢詩のことばをも句中に用いていると指摘している。

掲出句と同じく「滄浪の水」の文句を藉りた句、

滄浪の水濁りけり菊の花

この句は、ことばと原詩の意とを合わせ藉りた例。原詩は、屈原

の「漁父辞」で名高い「滄浪之水清兮、可_レ以濯_三吾_二纓_一」(滄浪の水が澄んだならば、冠_二ついている冠_一のひもを洗うのがよい)の一節。

掲出句について子規は、原詩からことばも藉りているが、「葱と言ひたるだけは意味を軽くし原詩の如く厳正ならず」といい、一部だけことばを替えて意外さを出す翻案を「抜け」というのだと指摘している。

抜けの手法が流行したのは、談林俳諧の時代で、周知の諺や俚言や和歌、謡曲、漢詩の文句などの一部を抜いて、謎めいた句体をつくるおかしみがもてはやされた。はじめは、余意の世界のおかしみをさぐるものであったが、しだいになにを隠したかをあてる興味の方に関心が移っていった。(「ぬけ風の俳諧」尾形仿)ぬけ風の例としてあげられるのは、「鹿を追ふ獺師か今朝の八重霞 舟中」の句から「鹿を追ふ獺師山を見ず」の諺を想像させ、「山を見ず」の文句の抜けを暗示。今朝は八重に霞がかかり山の姿も見えない景色を謎めかした諺を藉りて表わしたものである。「とし越やゆるぎの森の鷺すらも 益友」は、「たか島やゆるぎの杜の鷺すらもひとり」は寝じとあらそふものを」の歌により「ひとり」は寝じ」を連想させたもの。

俳諧史にも通じていた子規が、このような談林の遊戯的な手法を明治の俳句にも生かせないものかと興じたのが掲出句である。他に広く、漢詩からの翻案句をたくさんつくっている。

「採^レ菊東籬下 悠然見^ニ南山^一」(陶潜)を、

南山にもたれて咲くや菊の花

とすると、これは、半ば訳し、半ば翻案。

菊島南の山は上野なり

とすると、陶潜の句を踏まえた作。このような例は、まさに枚挙に遑^{いそ}がない。

掲出句に、冠の紐「櫻」のかわりに葱を思いついたのは、愛誦の句「易水に葱^{えすい}流るゝ寒哉^{さむさ}」(句稿屏風・蕪村)あたりからか。知的な発想でありながら、軽く写生風なのが、『新俳句』時代の子規の特徴なのである。

風や鐘引きすてし道の端

明治28年

『寒山落木』巻四所収。冬、風に出る。『癡祭書屋俳句帖抄上巻』、「病餘漫吟」にも入っている。新聞「日本」(明治31・12・23)には上五が「朝霜や」とあり、これが原句。「病牀六尺」(「日本」明治35・8・30)に「木枯や鐘曳き捨てし道のはた」と出し、一句の趣向について述べている。それによると、「大きな釣鐘を寺へ曳^ひっぱって行く道で日が暮れたものであるから、其釣鐘は其夜一夜は道のはたに曳き捨てて置く、其時の光景を詠んだ積りなので、従って時は日の暮か若しくは夜の積り、さうして講中の人数などは無論家に帰ってしまったふて、ここには居らぬのである。」とある。原句の朝霜と

すると、一夜たった朝の光景。子規は鐘を曳き出して途中で日が暮れた臨場感を出すために、風を配したものといっている。曳き出してきた人の姿を出さず、大釣鐘が、道端にひとりいる「物凄^{ものご}い淋しい場合」を想像したらしい。風にはたしかに日暮の時間が感じられる。

素材や着想に關し、いささか大時代風の詠み方が感じられ、「鐘ひとつ売れぬ日はなし江戸の春」(「五元集拾遺」、其角)の名高い歳旦吟あたりの鐘が想像されたものか、道端に鐘が曳き捨てられてある場景は、繁栄の都東京でも日常見馴れない意外性がある。子規には、常凡な句の中にときとして途方もない意外性をもった句がある。いまだ句風が固まっていなかった時期の作。

風や雲吹き落^(おと)す海のはて

明治28年

『寒山落木』巻四所収。冬、風に出る。「病餘漫吟」にもみえる。同時期の作に、

風や海へ吹かるゝ人の声

という、風が海へ吹く着想の句がある。このような着想は、子規独自のものではない。『分類俳句全集』(第九卷)冬天文、風にも出る。

風の果はありけり海の音

風の地まで落さぬ時雨哉

風に二日の月の吹きちるか

言水

去来

荷兮

など、蕉風勃興期の諸作を知った上で、それらの間を縫うようにして、作られたものではないか。言水の作は海鳴りに陸を吹きまくる風の果を想定したのに対し、子規の掲出句は、さらに想像が拡大され、海の果そのものを想い描いた点、海に親しんできた者の発想で、山人の発想とはどこか違う。写真と空想とが合わさったバネの効いた作といえようか。

風の外は落葉の月夜哉

明治28年

『寒山落木』巻四所収。冬、風に出る。「病餘漫吟」にも記している。「外」の一字は、はかとはいわず、そとと読むのであろう。風のしきりに吹いている戸外は、意外にも落葉が舞う明るい月夜だとの意であろう。『分類俳句全集』（第九巻）冬天文、風に、

風の塵一つなき月夜哉

宝馬

という知的な句がある。風は冬の初めに木の葉を吹き散らす風であるが、それほど暗澹たる殺伐の感じはない。どこからととした明るさがある。掲出句の風はそんな風。印象明瞭な句である。

山茶花を雀のこぼす日和哉

明治28年

『寒山落木』巻四所収。冬、山茶花に出る。新聞「日本」（明治31・1・23）に載る。『類祭書屋俳句帖抄上巻』、「病餘漫吟」に入

っている。山茶花は初冬の花、白色、淡紅色など椿に似ている。茶花として愛用の花であるが、江戸期の俳諧においてはじめて詠われ出した花で、天明期よりも元禄期に多くよまれている。庭樹に多く、楚々たる花の風情は、万花凋落の後だけに人目をいく。

板塀に山茶花見ゆる梢哉

右の句は「早稲田文学」（明治29・6・1）に「市情野趣」のうち市情をあらわす例句として載るもので、この点からも都会風の花である。

山茶花のこゝを書斎と定めたり

右の句は掲出句と同じ頃の作。静穏な日々を思わせる。江戸の俳諧書『毛吹草』（正保二）などでは陰暦十月の花とあるが、現今の小春日和頃の花。「雀のこぼす日和」がすなわち、晴天がつづき、おだやかなそんな日和をさしている。

納豆や飯焚一人僧一人

明治28年

『寒山落木』巻四所収。冬、納豆に出る。「病餘漫吟」、新聞「日本」（明治31・12・15）にも載る。『春夏秋冬』冬之部に表記「飯たき」とみえる。

貧乏寺そのものをうたったもの。飯焚婆さん（あるいは下男）と僧一人だというのである。納豆というと、京、大徳寺納豆が名高い。一休和尚が製法を伝えたともいい、別名一休納豆。いつか納豆

に一体さんのはなやかさがついてしまったが、本来は禪宗の寺の質素な食物だ。子規は、わびしい納豆そのものをうたったもの。数字を重ねる点も子規好みの句柄である。

元日の人通りとはなりにけり

明治29年

『寒山落木』巻五所収。新年、元旦等に出る。『新俳句』新年之部、元日に入っている。新聞「日本」(明治29・1・7)の掲載が初出。ただし、掲出句がつくられたのは、新年早々、一月三日、子規庵での初句会(子規は「発句始」といっている)の第一回運座の折。霜月、棼川、枯野原、富士、鮫鱈、水仙、雪、元日などの席題の他、上五文字「暁の」を春季結び、「うかうかと」を秋季結び、さらに、下五文字「明けにけり」を冬季結び、「厨」を冬季結びなどと言語ばかりではない語句をとり入れ、たいへん意欲に満ちている。第一回運座の参加メンバーは、催主子規の他は、鳴雪、飄亭、漱石、虚子、可全。

元日の句には鳴雪が天を入点している。元日は年の始めの格別すがすがしい気分が漲る一日である。それだけに、さりげない季語の用い方が好句を生む条件になろう。

掲出句をすこし分析的に鑑賞するならば、人通りとは―「と」と変化の結果を示し、「は」で人通りをとり立てて強調する。要は、この「人通り」をどのように受けとるかにによる。

『徒然草』の昔から、元日は大晦日の年越用意や掛乞のあわただしさと対比されて、そのうって変わった、のどかさや清新さが詠われてきた。その点では目新しい句ではないが、めでたさを気分として詠むのではなく、人通りに着眼し、すっきりとまとめた点、単純な「もの」に託して思いを述べる子規の写実俳句の特色をよく表した句である。

一夜明けると年の始め、大晦日の忙しさがどこへやら、神詣や年始回りの姿が見え、すがすがしくなごんだ人通りとなったことよとの意。

右のような句解に対し、元日一日の時の変化に焦点をしばった寒川風骨の説「元朝の市中は余り人通りもなく、平日よりかは至って静かなものである。それが日も早や高く昇ってくるにつれて、そろそろ廻礼の人が通るやうになる」(『夏子規俳句評釈』・東京大学館刊)がある。いわば大掴みに、元日以外の日との対比を考えるか、元日一日の趣きを徹視的にみるかの違いである。「なりにけり」とのういういしい叙法は、前者の把握の仕方がふさわしいのではないか。

一月三日は運座が三回もたれた。第三回運座には森鷗外も参加。鷗外は当時軍医学校長である。前年子規が従軍記者として金州に兵站軍医部長の鷗外を訪問して以来、交流が密になっていた。漱石と鷗外が句会に同席するというめずらしい場面である。

席題「霰」の個所を次に掲げる。

霰降る片側町の長屋哉

可全

吶喊なげんの又もや起る霰哉

飄亭

面白う霰ふるなり鉢叩

虚子

菜畑の次第上りに霰哉

碧梧桐

おもひきつて出て立つ門の霰哉

鷗外

井戸端の鍋も鹽も霰哉

鳴雪

湖の水にはちく霰哉

子規

雨に雪霰となつて寒念仏

漱石

鷗外が点を入れたのは、飄亭の句。鷗外の作には鳴雪、碧梧桐が入点。子規も抜き、虚子、飄亭、可全といちばん点が入ったのが鳴雪の井戸端の句。子規の句は漱石が抜いている。このとき、鷗外は戦場風景と霰を結びつけて点を入れ、自作にもしていたようだ。漱石はつねに滑稽味を風景の中にさぐる指向がはたっている。ささやかな一回の運座にも目をこらすと、各々の志向がうかがえるところがおもしろい。

今年とは思ふことなきにしもあらず

明治29年

『寒山落木』巻五所収。新年、元旦に出る。「三十而立と古の人もいはれけん」と前書。二十九回の新年を回想した「新年二十九度」(『日本人』第十三号・明治29・1・5)には一文の掉尾に「立つといひけん古の人の言葉も覚束なけれども」とあり、掲出句が出る。

而立を迎える二十九年に賭けようという子規の思いが伝わってくる。しかし、掲出句の表現がいささか散文的で、歯切れがよろしくないのは、わずかに歩行し得るのみという健康面への自信のなさによるものであろう。この点に関しては、一月に芝紅葉館で催された旧松山藩主久松伯の凱旋の祝宴に出席したものの、二月に入ると左の腰が腫れ、痛みがひどくなり以後褥中に呻吟する状態になる。

三月十七日には、リウマチ専門の医師の診察を受け、病名はリウマチではないと告げられる。虚子によると、子規はこのときすでに結核性の脊髄炎に罹っていた由。同じ十七日付の虚子宛書簡によると、覚悟は決めていたので驚かぬといい、詩や俳句を作るには、まことに誂え向きの病氣だといふことばといささか強がりを感じているが、医師の帰った後、こんなことをふと思ったと、おのれの心情を書き送っている。

元旦の抱負に触れた掲出句から二月余後のことになってしまふが、「今年とは思ふこと」の大きな輪郭は、こういったところにあった。

「世間野心多き者多し、然れども余し程野心多きはあらず。世間大望を抱きたるまゝにて地下に葬らるゝ者多し。されども余し程の大望を抱きて地下に逝く者はあらず。余は俳句の上に於てのみ多少野心を漏らしたり。されどそれさへも未だ十分ならず。縦し俳句に於て思ふまゝに望を遂げたりともそれは余の大望の殆んど無窮大なるに比して僅かに零を値するのみ」

右のような思いは、二十九年一月には、七日に「俳句二十四体」の第一回真率体を「日本」に発表以下四月二十一日まで二十四回連載する。俳句の句体を通して子規の中に、めざす新俳句のめざす新俳句のかたちが浮んできたのがこの年なのである。十三日には同じ「日本」に「従軍紀事」の連載第一回を掲げ、これは二月十九日まで七回連載。さらに、二十九年の特色は、俳句批評ばかりでなく、ひろく文芸時評を試した文が書かれることである。

「三十棒」(「日本」1・27、4・5、三回連載)、鵬外主宰の「めざまし草巻一批評」(「日本」2・3)、作家評家「(「日本」3・16)、「戯曲類と四季」(「日本」4・8、4・15、三回連載)などが年度早く書かれたものである。

蓬萊の陰や鼠のさゝめ言

明治29年

『寒山落木』巻五所収。新年、蓬萊に出る。『春夏秋冬』冬之部附録、新年之部、蓬萊にみえる。新聞「日本」(明治31・1・1)にも後に載る。

蓬萊は、蓬萊飾りのこと。三宝に白米を盛り、熨鮑、搗栗、昆布、^か框の実などを載せ、新年の祝いとしたもの。鼠と蓬萊とはかわりが深い。ねずみは大黒天のお使いだとか、福神様だという地方(千葉県館山、三重県渡会郡)があるように、ねずみがくると家が栄えると思われる。新年のねずみを嫁が君というのも、福をもたら

すものと信じられたねずみへの敬意からねずみということを忌み嫌ったものという。

正月飾りの蓬萊の陰からねずみのささやきがきこえるという句意。

「さゝめ言」という語句を子規は、二月下旬の子規庵の句会にも、ふくる夜をかしや星のさゝめごと

と出している。気に入ったことばだったのであろう。

掲出句は、これ以上格別の句ではないが、子規派の代表的な選句集『春夏秋冬』へ載せた虚子、碧梧桐の選者眼を考えると子規の句からははなれるが、別のおもしろみがある。子規の蓬萊の句では、『新俳句』に

蓬萊のちいさく見ゆる書院かな

明治29

右の句が入る。この句とくらべるならば、掲出句の方が、ぐっと物語性がある。この頃の虚子は子規よりも一段と、なにかを語りたく、物語を俳句に求めている俳人であった。

その点は、同じ『春夏秋冬』新年之部、蓬萊に出る、蓬萊と鼠とのかかわりをよんだ虚子の句をみると納得されよう。

蓬萊に徐福と申す鼠かな

虚子

「徐福」とは、有名な秦の方士。始皇帝の命令で不老不死の薬を求めて東海にうかぶ蓬萊山にむかったまま、ついに帰らなかったという。わが国の紀伊の国に漂着したともいわれ、新宮市にその墓がある。

徐福は鼠の名、蓬萊飾りに出沒するのは、蓬萊山と徐福との因縁から。虚子は、この頃空想的な神仙体の句を作ろうという志向があったようで、この句は虚子の意に適ったものと思われる。同じ取り合わせながら、子規と虚子ではかくのごとく異なっている。

低き木に鳶の下り居る春日かな

明治29年

『寒山落木』巻五所収。春、春日に出る。『頼祭書屋俳句帖抄上巻』明治二十九年春、『春夏秋冬』春之部にも採っている。新聞「日本」(明治31・5・14)、『反省雑誌』(明治31・3・1)にも載る。

作句は二十九年春、子規庵での運座で、上五に「低き木に」と冠せるのが席題。子規、虚子、碧梧桐、飄亭の他に佐藤紅緑、矢ヶ崎奇峰が加わっている。紅緑の句に、

ひくき木に梟下り居る夜明かな

右の句があるところから推すと、掲出句の形はあらかじめ話題になったものか。偶然とは思えない。春ののどかな水辺の田園風景が彷彿とし、子規の佳句として記憶されよう。

春風にこぼれて赤し齒磨粉

明治29年

『寒山落木』巻五所収。春、春風に出る。『頼祭書屋俳句帖抄上

巻』明治二十九年春、春風、『新俳句』春之部それぞれにも採っている。齒磨粉が詠まれた点が珍しく、碧梧桐は、「連翹に一閑張の机かな」の一閑張(器物に紙を張り、漆を塗ったもの)などと同様に齒磨粉が句になったことに感動したといっている(『頼祭書屋俳句帖抄上巻』ホトトギス第五巻第十二号明治35・10)。同じことは、白田亜浪も、「この句の手柄は「齒磨粉」といふ新しい素材をとり入れて巧みに詩化したことで、其の当時、私がこの句に見当った驚異は、今尚ほ麗ろ氣ながら記憶に存する。そして其の後、「齒磨粉」の句が世上に幾つ現はれたことであらうぞ。」(『評訳子規の名句』寶文堂書店)と書いている。素材の新鮮さは、『新俳句』時代の子規俳句の特色である。齒磨粉を一句に詠んだのは、子規がはじめてであらうが、齒磨粉はすでに『東海道中膝栗毛』七編上、弥次、北八の祇園社詣の場面に「齒磨うりの居合拔」として出ている。齒磨粉が居合太刀をぬく演技をして客を引いたのである。齒磨粉の掲出句と同じ年の春に、

永き日や人集めたる居合拔

永き日や太刀かざりたる居合拔

右のような二句があるが、あるいは、膝栗毛の場面を子規が承知して居合拔の句を成したのかもしれない。齒磨は、「始まりは、寛永二十年、丁字屋喜左衛門、朝鮮人の伝を受けて、これを製しける。其家を元祖江戸一番門屋と称す」(『道聴途説』)とあるという現今の齒磨粉は、炭酸カルシウム、燐酸カルシウムに香料、甘味料

などを加えたものであるが、江戸時代は、白陶土、珪藻土、軽石粉末、烏賊甲粉末などで加工したもの。歯磨粉ということばのひびきには、江戸文化の一端をささえた外来文化の明るさを感じられる。

歯磨粉への着眼の他に、上五「春風に」の置き方に関し、虚子と鳴雪との間で受けとり方のずれが問題となっている。

『子規句集講義』（大正5・8・10俳書堂刊）は、虚子と鳴雪が大正三年（一九一四）子規十三回忌を記念するために、九月以降半年、子規句集中から適宜選んで行なった「子規の句六回講義」のホトトギス連載分とさらにその補遺を集めたもので、その中で、虚子は、掲出句につき、「春風の濃艶とこぼれて居る歯磨粉の赤いとこととの配合の美しくさ」を指摘している。が、歯磨粉という卑近な素材をとり上げた点に強い刺戟を受けたといっている。これは先述の碧梧桐や亜浪と同様。

さて、「春風に」に関して、虚子はその置き方の弱さをいう。すなわち、「春風にしたところに尚従来のおほまかな句作法の名残があるのである。其の為にどこやら句に清新なところを欠き、事実らしいといふ力を弱めて居る」とし、後年三十二三年頃であったならば、子規は、決して春風にとは置かないで、もっと具体的な例えば、はこべらにとか春草にとか置いただろうといっている。虚子是一句の重点を「赤し」という字にみて、椿の花が地上に落ちていくように、赤い歯磨粉が土の上に沢山固まってこぼれているとみている。それは、「春風に吹かれて飛び散ったといふ場合ではなく、

どうかしたはづみに沢山な粉が固まって地上にこぼれてゐると解する」といふ、その印象明瞭さに注目する。

それに対し、鳴雪は、春風は歯磨粉によって具体的に写生されているといい、虚子の例示のはこべらになどというよりも、春風という方が配合がよく、「春風にこぼれて」というところが最も印象明瞭になっていると解している。「こぼれてとある以上、こぼれてゐる時のみならず、こぼれつゝある時もさすのであるから、上の春（春風か―宮坂）と結び付いて、未だ静止しない時も言ひ現はしたものである。」といっている。

虚子は、歯磨粉が縁先の庭か井戸端に赤くこぼれている景色の印象を、鳴雪は、春風によって歯磨粉がこぼれつゝある動きのある景色をと、一句を読みとる観点がそれぞれ違っている。虚子の印象明瞭志向に対し、鳴雪は繊細な微妙さを愛する。ふたりの理解の違いは句柄の違いにまで及ぶのであろう。

春雨のわれまばろしに近き身ぞ

明治29年

『寒山落木』巻五所収。春、春雨に「病中」と前書が付き出る。新聞「日本」（明治29・4・23）が初出。四月十二日が前年亡くなった従弟藤野潔（古白）の命日である。その日、子規は、「寒山落木」巻四にあたる明治二十八年の句稿を浄書し終り、凡例に相当する「ことわり書」を書き、その後の余白に、「此日藤野古白の一周

忌に当る 余一月下旬より腰痛みて足立たず三四日前よりやうやう杖にすがりて少し許り歩む程になりたるに快極まらず 今昨年の俳句稿を浄書し終りて更に心身の豁然たるを覚ゆ 余未だ死せず」と記している。病子規とも書く。以後、病臥が六年にわたることになろうとは、予測もつかない、いわば泥沼にさしかかる寸前の一喜一憂している時期である。

古白の一周忌追悼発句会は四月十九日に、不忍弁天僧房で開かれたが、「一昨夜来稍氣候におかされ候処今日は雨天かたがた以て出席せず諸君へよろしく御伝被下度候」と碧梧桐、虚子兩人宛に手紙を送り欠席する。

掲出句は、古白一周忌追悼の一句である。先述の新聞「日本」の記事は、「古白一周忌とはなりぬ」ではじまる三三〇字程の文であるが、彼岸における古白の奔放さかげんを想像し、胸にしみる名文。「松蘿玉液」と題す連載随筆の第三回目。その終りに、「古白曾て吾を恨めり。今や白雲の中より吾を招くが如し、其追悼会にも得行かざりければ」として、春雨の句が出る。

「春雨の」とは、春雨やとは異なる。さらに、「の」はばらの花、柿の木などという連体格の「の」とも、連用格（比喩格）の「の」のような意の「の」とも微妙に違う。春雨に降りこめられているわれの意で、敢えていうと連体格か。「まぼろしに近き身」とは、「病中」の前書の通り、病体のおのれは、あの世の古白から招かれ、まさにはかなく消え失せようとしている身だというのである。

表現に大袈裟なところが感じられるが、古白を偲び、あの世の古白に同感を得んと、古白に訴えているようなひびきがこめられている。

この年は、掲出句をはじめ、病中、病に臥して、病間ありと病に關する前書を付けた句が実に多い。翌三十年以降、病臥が日常となれば、改めて前書に付けることもなくなるのは当然であるが、本年は、病を意識し、病によって体が掻きむしられるような不安定な氣持を一句にした作に、この年の特徴がうかがわれる。病に關する前書が付いた春の句を掲げると次のようだ。

腰の疾に罹りて

立たんとす腰のつがひの冴え返る

病 起

のどかさや杖ついて庭を徘徊す

病 中

この春を鏡見ることなかりけり

病に臥して

我老いぬ春の湯たんぼ維摩經

病 中

つれづれやわれ寝て居れば春雨

病 中

寝て聞けば上野は花のさわぎ哉

病

鶯の鳴けども腰の立たぬなり

病間あり

椽へ出て見れば鳥飛ぶ春の空

病間あり

我床を出る時燕室に入る

病

梅咲くや剣に仗つて吾起き上る

病起小庭をありきまはりて

萩桔梗撫子なんと萌えにけり

春の夜や百物語升落し

明治29年

『寒山落木』巻五所収。春、春夜に出る。他には見えないので、格別印象深い句でもなかったのだろう。「百物語」は、江戸時代に好まれた怪談話。百本の蠟燭を一つの話が終わるごとに消していき、最後の蠟燭が消えたときに妖怪が出るとされた怪談遊び。森鷗外にも「百物語」と題した作品があるが、一読して、蕪村調の句柄と受けとれよう。「升落し」は、鼠捕りの仕掛け。枡の下に餌を置き、枡を支えている棒に鼠が触れると枡が落ちるある種の罠である。これも江戸時代の名残り。

一句は春の夜から連想される怪談話百物語と悠長なる升落しを並べたものか。

春の夜の燭消してお化物語

妖怪体十二句の一

春の夜や屏風の陰に物の息

怪談に女まじりて春の宵

同年作にみえる右の句と同想。子規が蕪村の影響から、物語風の妖怪談を仕立てることに興味をもっていたといえよう。

春夜の句には、尺八や三味線を詠んだ、

春の夜を尺八吹いて通りけり

春の夜を三味線引いて遊びけり

右の遊芸の句も、明治の現在よりも前代江戸の余蘊をとどめている句。写生を強調するのは、おのれのうちにある空想癖を意識すればこそ、空想や想像への歯どめとして必然であったのである。掲出句を含め、これらの句は前代江戸の風物を詠うことにより、過去という時間を間接的に描き出している。時間を詠うことがむずかしい俳句において、時間を具象化しようとした句としても、注目したものである。

行く春やほうくとして蓬原よもぎはら

明治29年

『寒山落木』巻五所収。春、暮春に出る。新聞「日本」(明治32・4・26)も「暮春」と題している。『獺祭書屋俳句帖抄上巻』明治二十九年春、『春夏秋冬』春之部、暮春にも採られている。ただし、後者春之部には中七が「ほうく」としてとある。

「ほうく」は草ほうほうなどと用いられ、乱雑に伸びているさ

まの意。「ほうく」は苞苞とも蓬蓬とも字が当てられる。「苞苞ハウハウ 草木茂也」(『色葉字類抄』)とあるが、蓬蓬も文字通り蓬に代表されるように草がさかんに生い茂るさまをいつている。いずれともとれるが、下五が蓬原だけに、蓬蓬の意とみておく。「ほうく」か「ほうく」かに関して、松井利彦が、「蓬原の茂る状態をあらわすことばとしては「ほうく」の方が茂りと拡がりを感じさせ佳句となる。」(『日本近代文学大系第16巻正岡子規集補注33』)といっているが同感である。上五の惜春の情は、草ぼうぼう生い茂る蓬原の形容だけに限定されないで、あたりをさまよう夢幻のひびきをさそい出すような働きをしている。

「ほうく」をよしとする立場から臼田亜浪の評がくわしい。

「行春の季感にそゝられた、はちぎれるやうな情意の動乱を、一先づ凝つとうちに潜めて、徐かに刻まれた印象の核心を掴み、『ほうく』として』に魂を込めて、眼前の光景を活躍せしめたもので、此の瞬間、自然と我れとは一体不二の真実境を味はしめる。其の張り切った感激は、一分一厘の弛びもない調子の緊密にも知られやう。」(『評釈子規の名句』)

行く春は古来、「暮れてゆく春の湊は知らねども霞におつる宇治の柴ぶね」寂蓮(『新古今集』)、「春の名残ながむる浦の夕なぎに漕ぎ別れゆく船も恨めし」藤原為兼(『風雅集』)などのように、海浜や湖川など水辺においてかもし出される情趣であったかもしれない。芭蕉の「行く春や鳥啼き魚の目は泪」、「行く春を近江の人

とをしみける」など行春哀歌はいずれも、伝統に則った水辺での作。

それに対し、掲出句は山野、野原での吟と伝統を意識において、あえて視点をずらした作であろう。「行く春」には、他に、

行く春や須磨の磯家の繋ぎ馬

行く春と須磨との取り合わせはいささか常套であるが「磯家の繋ぎ馬」まで着眼した点、子規の意欲がうかがえる作である。

行く春の三味線草や鏡草

明治29年

『寒山落木』巻五所収。春、暮春に出る。新聞「日本」(明治32・4・26)には、蓬原の句と同じく「暮春」と題し載る。

「三味線草」は、薺の花が実を結んだ後のぺんぺん草のこと。十字花科の一年生草木。花の後、三味線の撥に似た三稜平扁の実をつける。振ると、かわいらしい音をこぼす。名のついていたいわれだ。

「鏡草」は本来、ブドウ科のつるをもった漢名白薺とよばれる草のことであるが、さまざまな植物の異名を鏡草という。ががいも、浮草、朝顔、山吹、豆蔲、伊予葛、かたばみ、血止草、一葉草などみな鏡草とよばれる。掲出句の鏡草はいずれであろうか。暮春の花としては、山吹かかたばみあたりがふさわしい。あるいは、文字通り鏡草(白薺)を指すか、判然としない。

掲出句は、草の名に女の持ち物である三味線と鏡を配した点への

知的な興趣から作られた句であらう。見て作る写生にもとづいたものではない。蕪村の有名な作、「妹が垣根三味線草の花咲きぬ」(『蕪村句集』)からの着想ではないか。蕪村の三味線草は、祇園の妓女小糸との恋のさなかの作。女の家のみわりをさまよい垣根に咲く三味線草の可憐さ、愛らしさに小糸の面影をしのんだもの。

子規の三味線草にも当然、恋情が揺曳しているようが、それはかずかであり、三味線と鏡を名にもった草名の物づくしのおもしろさで詠まれたもの。

春の水妹が垣根を流れけり

明治29年

『寒山落木』巻五所収。春、春水に出る。掲出句の初出は、同年三月十三日、子規庵での運座。下村牛伴、佐藤紅緑と主人の三人。二月以来、左の腰が腫れて激痛が走り、子規は臥褥のまま。しかし、三月に入り句会は、二日、八日、九日、十日、そして十三日と頻繁である。紅緑は秋田から二月に上京し、子規庵の句会に加わった新参者。

運座は二回、二回目には席題、笹、日永、背戸の山が出るが、第一回目は自由題。

春の水楷子の下を流れけり
苔清水潺潺として流れけり
雲の峰天龍細く流れけり

「流れけり」の型の練習か。

掲出句は、前掲の三味線草とともに蕪村の妹が垣根云々の一句からの着想であらう。

句意明瞭。このところ、蕪村量貞が昂じて蕪村の句の措辞を藉りた句が目立つ。子規にとり、蕪村理解は、「俳句に人事的美を詠じたる者」(『日本附録週報』明治30・8・23)という蕪村のもつ都會型俳諧師の一面を照射して信奉していく。

先の「三味線草」につづき、「妹が垣根」の措辞の借用は、対象が自然物であっても、興味のあり方は、「人事的美」への関心である。子規に詠まれた、暮春の三味線草は、自然界で目に触れる単なる景物としての三味線草ではない。蕪村の句に詠まれた蕪村の美意識によって選ばれ、掬い上げられ、造型された三味線草ということばの一切を藉りすることで、子規のつくる世界は、いわば和歌における本歌取りのような知的に抽象され、洗練された、本句取りの人工的な世界をつくり出すことになる。

掲出句の「春の水」の世界はそのような本句取りの世界である。

三味線を掛けたる春の野茶屋哉

明治29年

『寒山落木』巻五所収。春、春時候雑に出る。『春夏秋冬』春之部、春野、新聞「日本」(明治31・5・7)に載る。春之部の表記「かけたる」「野茶屋かな」。

春野の茶店にひと休みして、ふと目にとめたのは、壁に掛っている三味線。さては、この女主人は色町の出なのかとの意。

掲出句の興趣は、「三味線を掛けたる」ことへの着眼により、その背景に小説風のドラマを想定してたのしむ点にある。この句などは、蕪村流の「人事的美」への関心からつくられたものといえよう。

春の館^{やかた}三つ目一つ目など集ふ

明治29年

『寒山落木』巻五所収。春、春時候雑に出る。「妖怪体十二句の一」と前書。ちなみに妖怪体の例句を掲げると、

春の夜や屏風の陰に物の息

短夜の幽霊多き墓場かな

稲妻や波黒く人魚出没す

宿替の百鬼群れ行く野分哉

冬木立骸骨月に吟じ行く

といった類。怪しさのたねが露^{あらわ}すぎよう。

蚊遣火や赤子煮え居る鍋の中

右の蚊遣火の句には、凝然としたが、掲出句の妖怪変化の集會がおもしろい。

世に好んで妖怪を描く画家は、ないわけではない。しかし、生涯妖怪画家で通したという絵描きはきかない。多くは、なにか人生の

軽機に、妖怪を描くことになる。

先日、北信濃、小布施の町で高井鴻山の妖怪の画を数多くみた。

鴻山は文化三年（一八〇六）から明治十六年（一八八三）、幕末維新の激動の時代に生きた塩や茶や酒造業を営む御用達商人であり、経世家。儒学、陽明学、漢詩、書、絵と京、江戸で一流の師につき学び、北斎を郷里小布施へ招き、象山とも交流を深める。しかし、ついに世に容れられずおのれのいづく理想と現実との間の苦しみは、憤懣やるかたなく、晩年は妖怪変化のみを描く画家となってしまう。すべて一つ目や三つ目ばかりの妖怪が描かれている。キャッキャッと奇妙な笑声をあげて愉楽にひたっている。ふしぎなことに二つ目という妖怪はいない。実は、一つ目や三つ目なんかより二つ目がいちばんおそろしいと鴻山は身をもって知っていた。だから決して二つ目は描いていない。二つ目を加えようと妖怪たちの円居が消え、愉しくなくなるからだ。

二つ目も妖怪のうち春浅し

静生

さて掲出句、まさに鴻山の絵の世界。「春の館」と字余りにして、明るく冠せたところ、常識的な妖怪理解を超えていてよい。鴻山の妖怪は、「無情の物である山河草木に憑依^{ひよ}があって妖怪に変ずる」のだという。この鴻山の妖怪考によると、三つ目や一つ目は、ものにとりつかれた松の木や雀や鴉や山や川がなかったものということになる。ユーモラスなはずだ。やはり二つ目の妖怪がいちばん怖ろしい。子規は、そのことを知りかけていた。

山焼くとばかりに空のほの赤き

明治29年

『寒山落木』巻五所収。春、山焼に出る。「世界之日本」（明治29・12・10）に「赤」と題して載るところから推測すると、「赤」の読み込み。本来、写実をきわめようとした句ではない。「とばかりに」が冗漫。しかし、山焼がはじまるという早春のいまだ寒気がこのころ夕方の空の気配が感じられ、一句におおらかさがある。このチマチマしない大掴みな描き方が紛れもない明治の新俳句時代の調子なのである。『新俳句』春之部、山焼に

雨ならん山を焼く火の広がりぬ

とともに採られている。

門前にほいといさかふ御影供かな

明治29年

『寒山落木』巻五所収。春、御影供に出る。御影供は、みえいく、又はみえくと読み、弘法大師空海の命日の法会をさす。大師は、承和二年（八三五）三月二十一日の入寂とされ、陽暦四月二十一日、正忌が営まれる。各地の真言宗の寺院は参詣人でごったがえす。ことに京都の東寺、御室の仁和寺、高雄の神護寺などは終日にぎわう。

掲出句には「松山言葉にて乞食のことをほいといふ」と前書が

ある。「ほいと」とは、陪堂の字をあて、ほいとうの約まったもの。元来、禅僧が寺外で食事のもてなし（陪食）を受ける意。転じて、食を乞う人、ものもらい、こじきの意になったものという。いまでも方言として北海道函館から宮崎県椎葉まで全国各地に残る。愛媛県は全域に用いられるが、子規の頃、東京ではすでに耳になかったもので、そこで、松山言葉云々の前書がついたもの。

門前は、住家の門前と軽く解すこともできるが、当時の子規の意味立てを重んずる作り方からすると、寺、ことに御影供の営まれる寺の門前とするのがしぜんか。

きょうはありがたい御影供の日、ほいとも人出をあてに出てきたものか、こともあろうに、寺の門前で縄張り争いをはじめていることよの意。

ほいととの争いを咎立てした句ではない。むしろほいととの争いも御影供の殷賑のうちと、春の好季に営まれる寺詣を淡々とうたったものの。「門前に乞食いさかふ」では興趣が乏しい。「ほいと」というまろやかなやさしい語感がよく、それがものもらいを指すという意外さに子規はおもしろみを抱いたものであろう。

松山語はどれもひびきがやさしく、まろやか。松山の方言を生かした子規の句をみると、意味の意外性と語感のまろやかなやさしさや張りが共通して指摘されるのである。明治二十九年（一八九六）の作から例にあげると、こんな松山言葉が詠まれている。

ばちんこに大風切れてしまひけり

右の句には、「松山語にて揚げたる風の糸をはぢきて風に響かすことをばちんこといふ」と前書がある。ばちんことは小石をとばす小道具やガチャンコという子どものあそび、さらに当り穴に玉を入れるいわゆるパチンコ、また火薬を破裂させるおもちゃなど想像される。が、少年の頃の風揚げの技のひとつ「ばちんこ」の通称におもしろさを感じ、一句に書きとめた点、上述の特色がいくつものではないか。土俗に根ざしたことは、思いがけない新鮮さが発見される。「ばちんこ」などその好例であろう。

砂原やほうしこ抜けばとなゝがら

右の句の前書には、「松山語にて土筆をほうしこといひ杉菜をとなどいふ」とある。「となゝがら」とは、とな、杉菜と一緒にの意か。ほうしこ、とな、いずれも語原がはっきりしないが、語感のおもしろさは、謎掛けのようなふしぎさがある。

鬼灯にぼちといふ女はんこ也

右の句には、「松山言葉」とある。鬼灯の方言をぼちといい、幼児で両耳の前に髪をそり残した子をはんこという。はんこは半髪（はんこう）の変化した語の由。ぼちは不明。幼児の方言がそのまま一句になった例としてこれらの句からも方言のもつ意味の意外性と語感のまろやかさ、やわらかさが汲みとれよう。

規範性のつよい東京語よりも、具体的なおもしろさにみちた方言への注目に、子規の写実主義の一面をうかがうことができる。

鶯の鳴きさうな家ばかりなり

明治29年

『寒山落木』巻五所収。春、鶯に出る。「根岸」と前書がある。新聞「日本」（明治31・3・23）にも同様の前書で載る。根岸は鶯の初音の里として江戸時代から名高い。「呉竹の根岸の里は上野の山蔭にして、幽趣あるが故にや都下の遊人多くはここに隠棲す。花になく鶯、水にすむ蛙もともにこの地に産するもの、其声ひとふしありて、世に賞愛せられはべり」（『江戸名所図会』）とあるように、上野山の東北麓、音無川の清流を中に、四季折々の田園風景は変化に富んでいた。ことに鶯は、元禄時代に將軍家に御鳥掛がつくられたのがきっかけで、大名から町人まで鶯の啼き合わせのコンクールに熱中した。啼き合わせ会は根岸の初音の里に設営された。以来、鶯と根岸は付きもの。

根岸の地名の由来は、付近に沼池があったので沼地の岸辺、すなわち根岸とつけたとか、上野山の崖下の地であるから、そう呼んだなど、諸説がある。いずれにしても、隠れ里のような幽邃閑雅な地を愛して、多くの文人墨客が住みついた。別荘や妾宅もあった。

「鶯の鳴きさうな家」とは、鶯が鳴いている家というよりも艶がある表現だ。樹木に囲まれ、風趣に富んだ一軒一軒が目に見える。

同じ時期の鶯を詠んだ句に「草庵三句」と題した、こんな句がある。

鶯の今朝も啼くなり檐の枝

鶯に烟のかゝる伏家かな

飯たかぬ朝も鶯鳴きにけり

右いずれも素朴な実感を詠んだ作。「門口に檐の下枝の茂りかな」(「めさまし草」、明治29・7・31「草庵」)の一句と勘案すること、門口にある檐の枝に鶯が毎朝きて鳴いたのにちがいない。またさかんに鳴いている鶯に炊煙がかかるようなむさくるしい住居でもあった(一句は、伏家に煙がかかることも受けとれる)。今朝は飯を炊かないのに、ちゃんと飯時には鶯が来て鳴いてくれるといった句。

根岸と鶯を詠んだ句は子規にも多いが、「鶯の今朝も啼くなり」の一句は、この時期の作として子規自身愛着があった。

『獺祭書屋俳話附録』として俳句を収めた中に、居住地の一年を詠んだ「根岸十二月」がある。後に三句さし替えられるが、はじめの十二句を掲げると、こうである。

- 一月 鶯よ名所の声は何となく
- 二月 ふら／＼と行けば菜の花はや見ゆる
- 三月 山桜杉の闇よりもれにけり
- 四月 わが庵は汽車の夜嵐時鳥
- 五月 古澤や家居の中に鳴く水鶏
- 六月 妻よりも妾の多し夕涼み
- 七月 朝顔の入谷豆腐の根岸かな

八月 ありく程の庭は持ちけりけふの月

九月 菊の垣犬くぐりだけ折れにけり

十月 名物の蚊の長生きや神無月

十一月 呉竹の名に音立てゝ霰かな

十二月 掛乞ひに根岸の道を教へけり

右の十二句はあたかも屏風仕立。一覽すると根岸の春秋が彷彿とする。季語のみをぬき出しても、春の鶯、菜の花、山桜、夏の時鳥、水鶏、夕涼み、秋の朝顔、月、菊、冬の残り蚊、霰、掛乞ひなど、東京の他の景勝地とは異なる隠れ里風な自然が想像されよう。

右の一月に配された鶯の句は「平凡にして見所無し」(『獺祭書屋俳話正誤』・「日本」・明治29・12・25)として、先掲の「今朝も啼くなり」に替えられる。鶯が檐の枝にくるとというのが、子規の強調したかった発見であろう。

さらにさし替えは、九月の菊の垣の句を、「俗気あり」として、

菊の垣南の山は上野なり

十月の名物の蚊の句を、「何等の趣味も無く極めて殺風景」だとし

て、
冬枯や庚申堂の小豆飯

といった句に替えられる。

さて、掲出句の前書「根岸」から次々と筆が逸れてしまった。子規の句に鶯は多いが、佳句はすくない。標題の句と「今朝も啼くなり」の句など、印象にとどめたい句である。

鶯や低い茶の木の中で鳴く

明治29年

『寒山落木』巻五所収。春、鶯に出る。「瀬祭書屋俳句帖抄上巻」明治二十九年春にも採っている。他に「ほととぎす」(明治30・2月)に「鶯 選者吟」としてみえる。

檐の枝に鳴く鶯もあれば、他のいかなる木に鳴かすのも、創作家の自由である。が、われわれの想像はそれほど自在に羽ばたけない。実感という意識が自在な想像をしばるのである。漠然としたい方であるが実感の質を糾すことこそ、作者の世界観を知ることになろう。

掲出句、属目が想像かあきらかではないが、「低い茶の木」に鶯が鳴くという着眼に新鮮さがある。「茶の木の中で鳴く」のみでよいのに、あえて、「低い」の三字が冠せられた点、茶畑がつづく茶どころだということであろう。わが家の庭先にある一本の低い茶の木という掴み方とは異なり、どの木もどの木も低い茶畑といった風景が思いうかぶ。

「梅に鶯などは古めかしいが、茶の木の中で鳴いてゐるのも亦一種趣があるといったのである。山城宇治あたりの光景か、又は寺の茶木原などの様らしく、鶯が低き木に鳴いてゐる位だから、其あたりの静かさも想像されて、鶯としては珍らしき句である。」(『子規俳句評釈』寒川鼠骨)

右の鼠骨の鑑賞の通り、梅に鶯風の発想を破ったところがまず評価されようが、子規の発想は、つねに梅に鶯風の古風さとなりあつてなされている点が、だいじなところである。掲出句のおもしろさは、梅に鶯の古風さがあればこそ、茶の木に鶯が新鮮に感じられる。

蛙鳴く頃しも小田の月夜かな

明治29年

『寒山落木』巻五所収。春、蛙に出る。他にも見えない句なので、子規が格別に重んじた作ではない。読み捨てた句の類であろう。たしかに、これといった曲がある句でもない。しかし、再三、口誦していると、これはまさしく日本の詩歌に詠われた日本人の幼時体験と重なる原風景ではないかと思われる。「原風景」ということばは曖昧な概念なので、すこし注記が必要になろう。

奥野健男は、文学の母胎となる「原風景」が書き手の幼少期と思春期とに形成されることに注目し、次のようにいっている。

「生まれてから七、八歳頃までの父母や家の中や遊び場や家族や友達などの環境によって無意識のうちに形成され、深層意識の中に固着する「原風景」、それは後年になればなるほど不思議ななつかしさを持って思い出され、若い頃にはわからなかった繰返されるその風景やイメージの意識が次第にわかるようになってくる。いわば魂の故郷のようなその人間の歴史の神話時代にも相当する「原風景」

景”である。もうひとつは二十歳前後のもっとも感受性が強い人格形成期に受ける衝撃的な原体験や感銘によってつくられる“原風景”である。自我の成立、社会環境と自我との異和や挫折などからの魂の傷痕、あるいは見てしまった未来というようなかたちで、彼のその後の生涯を決定する。」(『文学における原風景』)

右にいう前者、幼少年期に形成された原風景はひとりの個人的体験を越えて、歴史の中で日本人の共通の自然として存在する。その自然は一見客観的な風景として外にあるようでありながら、多くはわたし達の内側に記憶としてつくられている風景のイメージなのである。それが特定の空間(場所)を喚起する和歌あるいは俳句と結びついて形成されれば歌枕や俳枕ということになる。

ところで掲出句は、早苗の植えおわった直後の、田蛙が囃し立てる月夜の水田を詠っている。客観的な月夜の植田風景というよりも、多くの人の記憶に堆積された「仄かに展げてくる風景」(高橋義孝「原風景」)である。もとより、類型的なマンネリズムな風景のはずであるが、奥野のいうように不思議ななつかしさをつねに蘇らせる風景となっている。

『分類俳句全集』(第二巻)春の部、蛙の項には「月と地理」という観点から例句がある。

蛙鳴く田の水動く月夜哉

関更

月に聞て蛙ながむる田面哉

蕪村

蛙鳴く井に麦洗ふ月夜哉

几董

月見れば水静かなり鳴く蛙

蓼太

これらの例句は、いずれも高名な近世俳人のもの。月夜と蛙とはごくしぜんに関連づけて想像されるものであることが一目瞭然。さらに、小田と蛙との組み合わせも、同じ全集にいくつか例句を拾い出せる。

またくやあしたの小田の蛙ども

白雄

鳴出でゝ皆鳴く小田の蛙哉

孤舟

声々や小田の蛙や隣同士

友以

小田の蛙鳴き尽してやもとの水

平角

蛙鳴くや暮かゝる小田の水ひとり

文十

月夜と蛙同様、近世俳句にあつてはごく尋常な場景設定として小田は用いられていたことがわかる。子規の句は、月夜と蛙、小田と蛙の共通項をとり出し括った、蛙(小田と月夜)といった形。そこに、これといった取り合わせの新鮮さを見出せなかったので、手控集以外には採らなかったものであらう。

小田とは、田、たんぼ。小は接頭語。もとをたせば『万葉集』

「^{ゆたか}葺種ま^{あけ}く^き新^きの^き小田を求めむと足結出で濡れぬこの川の瀬に」

(一一一〇)に出る古語。下って芭蕉の杉風宛の書簡にも、元禄七年最後の東海道西行の途次、長い間不和であった荷兮と会い、そこで詠んだ句、「世を旅に代^{しろ}かく小田の行^{ゆき}もどり」がみえる。旅をするのは、代掻きの農夫が田の中を行き来するようなものだといった意であるが、田を指す語としてふつうに用いられていたことがわか

る。

しかし、掲出句から受けるひびきは、母音構成の上からもa音とo音の組み合わせで、明るく、おおらか。上五の「蛙鳴く」の語句は、河鹿と蛙の違いはあるにしろ、『万葉集』以来頻出する「かはづなく」の調子を継承しているものであろう。子規が新聞「日本」に「万葉集を読む」四回の掲載をするのは、明治三十三年（一九〇〇）五月十四日から七月三日の間。『万葉集』推奨がはつきり天下に知られるまでには五年の歳月があるが、子規は、分類俳句の作業を通して、近世俳句に多い（先掲の例句参照）「蛙鳴く」の向うに「かはづなく」の古歌のしらべ、「小田」の先に「をだ」の古語があることに気づいているのである。

いうならば、万葉調とでもいうような一句として、さりげない掲出句を私は愛誦しているのである。

侘^(む)びぬれば田螺^(たにし)鳴くなり夜もすがら 明治29年

『寒山落木』巻五所収。春、田螺に出る。新聞「日本」（明治29・1・24）の「俳句二十四体」雅樸体の例句として載るのが初出。雅樸体とは、「陰に属する句、即ち消極的な句をいふ。淋しきもの、古きもの、寂びたるもの、衰ふるもの、貧しきもの、皆雅樸なり。雅樸普通に古雅ともいふ。」とある。一言贅言を加えるならば、右の雅樸体の説明は、けっして、どうしようもなく暗く、寂しく否

定的なものと陰性面を強調しているのではない。雅樸は古雅だという。古雅とは、事物のさまが古風な上品さをもっていることをさしたことば。すると、古来、日本人の感性の受けとめ方の中には、「淋しきもの、古きもの、寂びたるもの、衰ふるもの、貧しきもの」などを、単なる陰性なものと受けとらないで、むしろ陽性なもののもつ野卑の一面と対比する意味で、「古風な上品さ」をそこにみようとする傾向があったことを思いおこすのである。

掲出句は、つらい思いでいると、一晩中、どこかで田螺が鳴いているようだという。「鳴くなり」は終止形十なりは伝聞・推定。連体形十なりは断定。ここは「鳴く」が終止形、連体形同形なので判断がむずかしいが、多くの場合、音を示す動詞「鳴く」などが来るときには前者。

「侘びぬれば」「夜もすがら」ともに和歌に用いられた語句。たとえば、「わびぬれば身をうき草の根を絶えてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」（『古今集』・雑下）小野小町、「わびぬれば今はた同じ難波なる身をつくしてもあはむとぞ思ふ」（『後撰集』・恋五）元良親王など高名なもの。同じように『百人一首』から「よもすがら物思ふ頃は明けやらでねやのひまさへつれなかりけり」（『千載集』・恋三）俊恵の例歌を掲げれば、両語句がいかにかに歌によまれた常套語句かわかって貰えよう。

ところで、中七の「田螺鳴く」は俳諧そのものの季語。田螺は『花火草』（寛永一三年刊）以来春二月の季語としてあがっている

が、田螺鳴くが出るのは、『四季名寄』（天保七年刊）と遅い。まったく空想の季語。もっとも、幕末弘化年間（一八四四—四八）に出た『寝ぬ花のすざび』（片山賢）には、田螺が鳴くさまが次のように書かれている。子規がこんな一節を知っていたかどうか審らかではないが、おもしろいので参考までに掲げておく。

「田螺鳴くといへる事、俳諧季寄などにも、春の部にいだし、発句もあり、且農俗よく是をいふ、早春雪消より耘耕の頃まで、田間つねに其声をきくといへども、心を用ひざれば、其何物たることを知らず、予過し春、頸城郡にありて、はじめてその田螺なることを聞く、されど、心を用ひ耳を傾るに、古呂々々加良々々の声寂寥と、かの長安の鼓吹にも恥ざるべし」

荒唐無稽なる説はもとよりである。ただ、「田螺鳴く」なる季語は近世俳人にも好かれ、『分類俳句全集』（第二巻）の例句を掲げると、晓台、士朗、葛三など中期以後、幕末の俳人に多い。

蛭肥し芹生の水や田にし鳴

晓台

田螺鳴く畝のたんぼゝ打ほけぬ

晓台

（一説、「小田にたむぼゝ」）

ほしかげに田にし鳴くなり豊浦寺

大江丸

田螺啼く泥田に棒の雫哉

四川

田螺鳴て土くさき春の夕哉

保吉

なく田螺聞んともなく聞夜哉

保吉

音に鳴くと聞けば淋しき田にし哉

士朗

春嬉し田にしの鳴くに及ぶ迄

葛三

子規は当然、これらの句を知っていた。「田螺鳴く」をいかに用いるか。たとえば、士朗のように「淋し」を強調するか、反対に葛三のように「嬉し」という明るい情景をつくり出すか。

子規は、前者の情景をかりて、むしろユーモラスな句にした。「侘びぬれば」は恋歌の常套語。つらい思いに沈んでいるとーという詠い出しは、平安貴族の歌人にとっては、顔面通りに実感としてつらい思いがそこにあるのではない。むしろ、そんなことを空想できるのがお洒落であり、へい感じなのだ。中七は、見事に、恋歌の上品さを畑土の天地返しのように、俗な俳諧そのものの田螺の鳴き声で、ひっくり返している。つらい思いでいると、へ古呂々々加良々々と田螺が鳴くようだ、それも一晚中。

和歌によくつかわれる語句を借りて、その和歌的な古風で上品な連想を、卑俗な俳諧の季語ではぐらかす。あざやかな一句である。

ころがりて住む世の中や田の田螺

同時の作。おもしろい句だが、こちらは、

（は）こ（ろ）ろ（が）り（て）も（と）行（く）ら（ん）でも行田にし哉

雁宕

右のような句が『分類俳句全集』（第二巻）にある。表現は違うが、着想は近い。

受付日 一九八八年九月三十日